一　松濤　船越義珍先生

早稲田大学空手部

昭和二十四年（一九四九）四月、早稲田大学第一法学部に入学し、空手部に入部した。師範は船越義珍先生であった。

先生の、教育者としての長い経歴から生じた信念を元としたご指導は、明確であった。良き先輩、同僚に囲まれた生活は、敗戦の中から再び立ち上がる大きな力となった。

稽古は、武田穣二主将指揮の下、厳粛な雰囲気の中、整然と行われた。稽古は基本動作、突き、蹴り、基本の形、基本組手の習熟に重点が置かれていた。

元来、空手部の道場は大隈講堂の裏手に、ボクシング部、レスリング部の道場と共に、長屋のように建てられていたというが、戦災で消失し、旧体育館二階の剣道場が稽古場となっていた。体育館といっても、元々一階が柔道場、二階が剣道場で、屋上に弓道場があり、武道館に近かった。戦後、剣道・柔道を学校で行うことをＧＨＱが禁止したため、一階をレスリング部とボクシング部が、二階の剣道場と剣道部の旧部室を空手部が管理する形になったようである。道場は一五〇坪あり、戦前の重厚な造りで、立派なものであった。

体育館横の庭には、拳を鍛える巻わらが一列に並んで立てられていた。法学部の授業が終わり次第、ここで拳を鍛えた。しかし時には時間等の関係で出来ないことがあった。そこで家の庭にも、巻わらを立てた。裏庭に檜の木を切り倒した物があったので、これを斜めに切り、弾力が付くような柱とし、深く埋め、私の部屋の前に立てた。これに筵をほぐして束ね、基礎の台を作り、その上にわら縄を叩いて柔らかくして巻き、柱につけ、これを毎日突いて拳を鍛えた。

船越義珍先生

早稲田大学空手部は、船越義珍先生を師範に奉じて、昭和六年（一九三一）に創立された。船越先生は幼少の頃より書、詩文を学ばれ、その雅号が松濤であった。先生ご自身は空手に流名を名乗られたことはなかったが、先生のお教えを受けた門人は、松濤館流と称していた。

先生は明治三年（一八七〇）十一月十日、沖縄の首里市山川町に生まれた。しかし、先生の

著書『空手道一路』（講談社、昭和五十一年）によれば、先生の本当の生まれは、明治元年（一八六八）であり、若いとき目指された医学校の受験資格が、明治三年以後の出生という条件のため、戸籍上三年生まれにした、ということである。したがって私がご指導を受けた頃、先生は81歳を超えられていたということになる。ちなみに前記の著書によれば、先生は医学校の入学試験には通ったが、入学の条件として、沖縄士族の象徴である丁髷を切らなければならないことがあったため、入学をあきらめたとある。だが、十九歳の時、小学校準訓導の検定試験に受かり、二十一歳の時以来、三十年教壇に立たれている。このときはやむを得ず髷を切った次第も記されている。

私が空手を知ったのは中学に入って直ぐの頃だった。自由が丘の家で祖母の甥の子の栗田真から空手の基本を教えてもらった。その時、船越義珍先生のお名前を知ったのである。彼は戦前、豊島区の雑司ケ谷にあった松濤館に入門していた。だが、松濤館道場は昭和二十年の空襲で焼失した。しかもこの年、先生の跡継ぎとされていた三男の義豪先生も病で亡くなられた。早大生当時、私はこのことは知っていたが、後に読んだ先生の著書によれば、その直ぐ後、昭和二十二年には奥様を亡くされていた。私は先生の穏やかな表情の中に、こんな苦労がおありだったことを知らなかった。

先生の背丈は私の胸の下ほどであった。温厚な紳士で、終始穏やかなお話ぶりであった。

「空手に先手なし。若し自分から攻めて勝ったとしても、それは負けです」

長く教育者としての生活をなされていた先生の武道観は、鎌田（渡部）俊夫先輩に下された「修文錬武」という先生の揮毫額にも示されている。私は、先生の著書『空手道教範』（廣文堂書店、昭和十六年）を徹底して読み込み、弛まず繰り返し稽古した。

先生がお出になると、道場一帯に静かな緊張した雰囲気が広がった。我々は、より身の引き締まる思いで稽古を行った。先生は静かに歩き、あるいは立ち止まって、じっと我々の動きをご覧になった。

稽古終了後、先生をお見送りする役を命じられたことがある。先生は和服だ。ゆっくりと早大構内を横切る。早稲田大学創立者、大隈重信候の銅像脇にあったレンガ作りの恩賜館は、空襲で焼け落ちたままだ。そこから真っ直ぐ大隈庭園の横を抜け、江戸川橋、飯田橋方面に通じる大通りに出る。そこに都心に向かう都電の始発停留場があった。その辺一帯も、まだ一面の焼け野原のままだったが、停留場の真ん前に、小さな掘立て小屋の太鼓焼屋があった。先生は甘い物がお好きだった。三個の太鼓焼きをゆっくりと、おいしそうに召し上がり、お茶を啜られた。先生に都電の回数券を二枚お渡しする。電車に乗られた先生は、振り向いて帽子をとり、

「ありがとう、もう結構ですよ、お戻りなさい」と言われるのが常であった。電車が出るのを見送って、私は道場に戻った。

船越義珍先生は昭和三十二年（一九五七）四月二十六日、逝去された。

早大空手部の特徴

早稲田大学空手部には、二つの大きな特徴があったと思う。

一つは、優れた良い先輩が多くおられたということだ。先輩の中には、卒業後、日本中そして沖縄まで、空手の武者修行に回られた人もある。野口宏（のぐちひろし）、江上茂（えがみしげる）、鎌田（渡部）俊夫、奥山忠男（おくやまただお）、渋谷松男の各氏、今思い出しても直ぐあげられる先輩方だ。創立者の一人、野口宏先輩はたびたび学校に来られて後輩を指導激励された。鎌田（渡部）俊夫先輩の明瞭で勇壮な動作は、現役部員の心を奮いたたせた。先輩は後にアメリカ空軍の空手指導のため、派遣された松濤館出身の各大学ＯＢの一員として、アメリカ本土を巡回されている。

そしてもう一つは、現役部員には、稽古に心の世界を求める者が多かったことである。ことさらに心について話すというわけではなかったが、これは、問わず語らずの内にも感じられる

早稲田大学空手部。体育祭にて（昭和 25 年）

ことであった。

部員は入会年度によって幹部、中堅、中古、新人と言われていた。稽古は毎日二時間、真剣であった。幹部、中堅、中古それぞれが、自分の稽古を真剣に行っていたから、下級生に対して、その人格を傷つけるような言動、風習は全くなかった。このように、早稲田大学空手部は誠実な会だった。

夏の佐渡ヶ島合宿における合宿運営の方法、年間の稽古と規律、昇段審査、部員章の授与、寒稽古、年末大晦日から新年元旦にかけての越年稽古等、後の私の武道研究に大切な経験となった。また、この経験が、後に行われることになった、

各大学における合気道部創設の土台となった。

なお、当時一緒に稽古を行った部員の中には、アメリカ・サンタバーバラに本拠をおき、世界的に活躍している大島劼、ヨーロッパ特に英国で活動している原田満典など、一生を空手の研鑽に捧げた者もいる。

植芝盛平先生の話が出る

昭和二十五年、大学は春休みとなり、空手部も自由稽古の日が続いていた。我々は時間の許す限り稽古を行った。

休憩時間に、どういうわけか、はっきりとは思い出せないのだが、合気術と植芝盛平先生のことが話題となった。原田満典が、竹下勇海軍大将（相撲協会の会長もされて、誰もが知っていた）が外国武官を合気術の技で苦もなく投げたということを話した。するとその時、武田穣二主将が「家の知り合いに、植芝先生をよく知っている者がいる。多田が行ってみたいなら、住所を聞いてやろうか」と言われた。それにしても、未だに、どうしてこの時、植芝盛平先生の話となったのか、不思議に思っている。このことがなければ、私の一生はまた異なるものに

なっていたはずである。

翌日、武田主将から渡された紙には「植芝道場　新宿区若松町一〇二番地」とあり、「抜弁天の近くだそうだ」と言われた。

私が合気術と植芝盛平先生について、初めてそのお名前を知ったのは小学校四年の頃のことだった。この年、昭和十四年の正月十五日、六十九連勝を続けていた双葉山が前頭三枚目の安藝ノ海に敗れ、日本中がこの話で持ちきりだった。夕食の団欒でもよく、そのことが話題となった。この他、武道に関する話題も多かった。ある時父が、親しかった矢野一郎氏（元第一生命社長、剣道範士）から聞いた、植芝盛平先生の話をしたのである。矢野氏は東京府立一中、旧制一高、東京帝大を通じて剣道の選手であった。「植芝盛平先生は当代一の武道家だ。格が違う」と言われ、植芝先生の稽古で、知り合いの武道家が一瞬ではね飛ばされた時の様子を話されたという。父はふと「宏、植芝先生についてみるか」と言った。すると母が即座に「まだ早すぎます……」と言ってその話は終わりとなった。

その後、昭和十七年（一九四二）、満州の新京で行われた、満州国建国十周年祝賀演武大会での、植芝盛平先生の演武を見た従兄弟・荒井定雄の話を聞き、私は植芝先生に対して秘かな憧れをもっていた。

植芝道場を探す

昭和二十五年三月四日、午前中早くから昼過ぎまで空手部の稽古を行い、その後、植芝道場の場所を探しに行った。若松町は早稲田のすぐ南だ。ところが当時は、今日ある「箱根山通り」という早稲田から真っ直ぐ統計局前に向かう道はない。途中には、旧陸軍第一病院（今日の国際医療センター）、都立聾唖学校、陸軍戸山学校跡には平屋の都営住宅（戸山ハイツ）などが、どこが区切りなのか、道も分からないくらい草茫々で、雑然と広がっていた。そこで馬場下から夏目坂を登り、都電の若松町停留場に出た。都電の通りをしばらく新宿方向に進み、抜弁天の少し手前を右に曲がると、戦災を免れた住宅街があり、その中の一軒の大きな石の門柱に「植芝」と白い表札があった。左手には道場と分かる高い大きな建物があり、ガラスの引き戸があった。道場には人影はなかった。正面には格子戸の広い玄関がある。右手には、植芝家の住居と思える平屋が広がっていた。

玄関で案内を請うと、中から返事が聞こえたので、格子戸を開けて入る。若いご婦人が出てこられた。後で分かったことであるが、植芝盛平先生の三男で二代合気道道主・植芝吉祥丸先生の嬉子夫人だった。私は入門をさせていただきたいこと、そして「合気とは何か」など、いろいろなことを質問したように思う。今日とは違い、合気の技は公開されていない。したがって私は合気がどのようなものか全く知識がなかったからである。私にあったものは、植芝盛平先生に対する尊敬と憧れだった。合気の技を習いたい、という気持ではなく、植芝盛平先生につき、修業をしたかったのだ。

私の無遠慮な質問に嬉子夫人はいちいち丁寧に答えてくださった。夫人が言われた。

「合気がどのようなものか、父をご覧になれば、お分かりになります」

この言葉だけは、今もはっきりと記憶している。そして植芝先生は今、関西に旅行されているが、二、三日中には帰京する予定であると言われた。そして「間もなく稽古を行う人が来ると思いますから」と言われ、道場に案内してくださった。

玄関の広い板の間を進み左に曲がると、そこが植芝家から道場に入る戸口だった。入口から右手には、板戸の仕切りがある。道場は六十畳の広さがあり、縁のない琉球畳を刺してある稽古畳が、四十枚敷かれている。畳は随分すり切れているのもあった。残りの二十畳は黒光りしている板の間だ。天井は高く、大きく太い格子が組まれている。正面には高さ一尺、幅三間、奥行き一間の上座があり、中央の床の間には、龍の顔が描かれた、大きな掛け軸が掛かっている。上座の右手にある窓の下に木刀、杖、木銃が掛けてある。その右手の壁には門人の名札が

掛けてあった。またその右手中央に、大きな時計が掛けてあり、その下が門人の出入口になっていた。南側はガラスの窓で道場全体が明るかった。道場には、特殊な趣があった。何よりも感じることは、道場全体に長い間（この道場は昭和六年建築であった）、多くの人が真剣に修業を行ってきた雰囲気が染みこんでいた。

私が座っている板戸の後ろで、咳をする人がいた。道場はもともと八十畳で、この板戸の後ろ二十畳に、戦災で家を失った一家が住み続けていたのだった。昭和二十年の空襲で植芝道場の西隣の家まで戦災にあった。その約三十所帯の人たちのため、植芝家では道場を住居として提供した。戦争が終わって五年経っていたが、経済状態が苦しく、出て行けない一家もあり、この二十畳が、稽古人の更衣室として使えるようになったのは、私が入門して随分経ってからであった。

しばらく経つと、がっしりとした体格で、紺の剣道着姿の青年と、柔道着に黒帯を締めた小柄な年配の人が現れた。青年は剣道五段で早稲田大学剣道部主将の菊池登喜雄さん（後に大竹）、もう一人は前日入門した菊池幡さんであった。

それから行われた入り身、転換、四方投げの動きは、私にとって非常に新鮮に感じられた。それは、菊池登喜雄さんの説明にもよるが、体の動きが非常に合理的で、無理がなかった。菊池幡さんは動きを教わるたびに「なるほど、なるほど」と感心しながら行っている。

この時から後、菊池登喜雄さんは早稲田の先輩でもあり、直ぐ親しくなり、技の基礎を覚えるなど、全てにわたって大変お世話になった。

戦争が終わって五年は経っていたが、依然として日本社会は混沌としている。その中で、早稲田大学空手部の稽古に熱中し、その縁で植芝道場の所在が浮かび出て、しかもそれが早稲田の直ぐ近くであり、初めて道場に通されたとき、早稲田大学剣道部の主将である菊池さんに会う、というような繋がりが、まるで約束されていたように現れた。この不思議な導きに、言葉にはない感動を私は感じていた。しかしこれが、私の一生に大きく影響し、生涯を通じて合気道の探求をすることになるとは、この時は、まだ全く思っていなかった。

植芝道場は当時、正規の稽古時間は午前と午後、六時半から一時間であった。二人の菊池さんの稽古はそれを過ぎても続いた。